

絶望の淵に立ってもあきらめない

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

このところあまり何か書きたいと思えるような本に出会わなかった。それは、もしかしたら、私が年をとってしまって、感受性が鈍ってしまったせいなのかもしれないと思う。いや、単に疲れているだけなのだと私は思っていたのだが。そのようなわけで、この原稿の締切が迫ってきて悩んでいたとき手にしたのがこの本だった。

本書は、イギリスの探検家シャクルトンの示した行動から、彼の人となりを掘り下げ、リーダーシップのあり方を教訓的にまとめたものである。今、アメリカやイギリスをはじめとして世界的に、シャクルトン流のリーダーシップへの関心が高まっており、ブームになっているのだという。帯封には「心がふるえる。感動がとまらない」とある。「絶望の淵に立ってもあきらめない」「エンデュアランス号遭難南極で二年間漂流 28 名全員生還！」ともある。

これは 1914 年、第 1 次世界大戦が始まった年に、南極大陸横断を目指したシャクルトンがその冒険に挫折しつつ、零下 27 度の酷寒の南極からどのように乗組員全員を統制して抜け出すことができたのかについて書かれたものである。

その年、氷の状態はいつになく悪かった。現代のような砕氷船もなく、大陸を目の前にして凍った海で越冬しなければならなくなる。「氷塊が割け、巨大な“リード”，つまり新たな水路が姿をみせるたびに、希望が膨らみ、全員が甲板へと急いだ。だが、船がごくわずかも進まな

いうちに、また流氷に囲まれる。やがてリードは少なくなり、まったく身動きできないことが明らかになった」という状態から、結局は船を捨てざるを得なくなり、「ただ生きていくだけでもとてつもなくむずかしいことが突然明らかになった」のだった。大陸横断という目標はすでに消え去り、いかに無事に生還するかが課題となる。そして、その困難な課題はシャクルトンが卓越したリーダーシップを発揮することによって成し遂げられる。

シャクルトンの素晴らしさは至るところで述べられる。目次だけでもすごい。「何事も恐れずに、寛大さを持って」「身分、地位よりも、意欲で人選」「階層を破壊すれば、結束は固まる」「命令しなければ、人は動く」「過去を捨てることで、最善の選択ができる」「試練とは、突破するためにある」「絶望を乗り越えてこそ、目的地へ」。これだけでも十分教訓的だが、本文で描かれるシャクルトンの具体的な行動は、見事に自制され、自信に支えられた勇気にあふれるものであり、さらに他者への思いやりや細やかな配慮の行き届いたものなのであった。確かにこのような人がそばにいてくれたら、どんなに心穏やかに過ごせるだろうと思う。

ただ、各章毎に〈シャクルトン流〉隊員の選抜法とまとめ方、忠実で結束あるチームのつくり方などという著者の解説があり、それが多少鬱陶しかったのは事実だ。物語の流れが途切れ、感動が止まってしまうのが残念だった。▲



さかた・みよし

この 4 月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、つつい、ZZZZ・・・。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374